

鶴岡首席交渉官による記者会見の概要

日時：平成26年10月17日（金）18：50～19：00

場所：成田空港第2ターミナル

【質疑応答】

（記者）

今回のキャンベラでの会合の位置づけと、日本が交渉で目指すポイント如何。

（鶴岡首席）

今回、シドニーで25日から閣僚会合が予定されていることを受けて、事務方としては、閣僚の間で噛み合った議論を行っていただけるような準備をするために、キャンベラで協議をする日程が立てられたので、その会議に出ることとなった。今回は、シドニーでの閣僚会合でできるだけ成果を出し、その成果を11月のAPEC首脳会議につなげることが目標なので、その目標に向けてまずキャンベラから作業を開始するという位置づけになる。日本としては、これまでもTPP交渉に参加して以降、国益を最大限実現するために努力してきたところであり、今後、最終段階にかかっていくという流れの中でも、日本の基本的な立場は維持しながら、且つ最大限の成果を目指して努力を続けていきたいと思う。

（記者）

先ほどAPEC首脳会議に向けてというお話があったが、APECに合わせてTPP首脳会合も開かれるだろうという見通しのもとで、ということか。

（鶴岡首席）

APECでどのようなTPP関連の会議が開催されるかについては、現時点では未定である。ただ、TPPはAPEC域内の経済連携と自由化を目指して行われている交渉なので、APECの首脳が集まる場で話題になることは間違いないと思う。そういう意味でも、年に1回開催されるAPEC首脳会議がTPPにとっても1つの目標になることは自然なこと。ただし、今の時点で具体的に、首脳との関係でAPEC首脳会議の際にTPPの会議が設定されているということはない。

（記者）

日米協議がまだ決着せず続いている状況だが、それが今回の一連の豪州での会合にどのように影響するとみているか。

（鶴岡首席）

日米協議は残念ながらまだ決着を見るに至っていない。日米協議については、我が国から様々な情報が発信されていることもあり、国際的に非常に大きな関心と呼んでいる。TPPに参加している国々は、やはりTPP域内の最大の経済をもつ米国と、それに続く経済規模の日本の間で早く決着を見て、その結果を共有した

上で、自らもどう対応するかを決めていきたいという考え方が支配的である。従って、まずは日米が決着しないことには、彼らとしても自分の立場を決定するに至らないという考え方がよく表明されている。他方、日米の交渉も煮詰まってきているので、今回、キャンベラでの協議の場を通じ、そしてシドニーにおいては一層、日米の決着が実現していれば勿論それで結構だと思うし、仮に実現していなかったとしても、ほぼ決着に近いところまでいくことを少なくとも我々日本側としては強く希望しているので、その結果が今度は全体を進めていく原動力になることを是非実現していきたいと思う。

(記者)

いわゆる難航3分野の解決にこういった貢献ができるとお考えか。

(鶴岡首席)

日本が交渉に入ったのは1年ほど前だから、それまで既に4年にわたり行われてきた交渉なので、日本ができる貢献というのは限られているかと思っただが、実はまだその時点でも難航している分野についての交渉は遅れていた。その状況の中で、日本も参加した上で、難航している分野の進展のために、日本も具体的な案を出したり、あるいは少人数の会合を設定して、それぞれの立場をよく理解した上で、進展できるような提案を作り上げるとか、そういった形でいろいろと協力してきている。今言われている課題として、全体の分野の中でも国有企業の規律の問題、あるいは知財の問題、それから環境の問題、こういった問題はまだまだ容易ならざる課題が多く残されている。技術的な問題もあるが、政治的な決断を要する問題もその中には多く含まれているので、我が国としてはできるだけ高い水準の規律の実現を目指して、これらの困難な分野の決着を実現するためにできる限り努力したいと思う。我が国はアジアの国として、アジアの国々とは親しく話をし、連携もとっているので、全体をまとめる上でそれなりの貢献ができるのではないかという自負をしているところである。

(以上)